語彙の構造と思考の形態

佐竹昭広

I

言語がそれ自体ひとつの体系を成し、構造を成しているということへの強い認識から、今世紀の言語学は開花した。二十世紀の言語学を、前世紀の言語学から、截然と区劃する一線は、構造の概念にあるということができる。

この記号の体系としての言語と、人間の思考活動とが、絶対に無関係であり得ないことは明かである。言語の内的形式の追究に専念したフンボルトもそうであったように、近くはカッシラーも、また独自の立場に拠って、言語と思考の相関を強調する一人である。すなわち、あらゆる人間活動を支配する根本原理として樹立された象徴形式の哲学に従えば、人間はただ広大無限の実在の世界に生きているのではなく、象徴という別次元の宇宙に住んでいる。神話・芸術・歴史・宗教などと共に、言語はこの宇宙の部分を成す一形式なのである。事物そのままの世界ではない、象徴の宇宙に在る人間には、それゆえ、実在に直接当面すること、面と向って実在に対することは不可能である。象徴形式としての言語の中に、己れを包含してしまっている人間には、言語という人為的媒介物を間にはさむことなしに、何ものを考えることもできない。組織であり構造である言語は、その内部に、使用者たる人間の外界に対する分析、世界把握の態度を織りこんでいるのだ。而して、この言語たるや、個人の意志を全く無視したものであって、人はそれを、各自の所属する社会から、完成した形で否応なしに強制されるのである。言語構造に包みこまれている思考の型や論理組織は、したがって、個々の人間の思考を規定する。人間である限り、思考は必然的にこの宿命を免れない。つまり人々は、言語の構造という額ぶちの中から、紋切形に世界を見ているに過ぎない。言語が注目することを教えたものだけしか、世界の中に認めないのである。「われわれは認められた論

拠の上で生活する。そして世界をありのままにではなく、人から聞いたように、こうだと説明されたように、世界を見る習慣をすぐつける。人が尠けに知らせなかった間は、いかに多くの病気が存在しないように見えたことか。」とはジイドの言葉である（『ドストエフスキー』）が、これは言語と思考についても、含蓄に富む言葉として通用するであろう。

スペクトルにかけられた色彩を、現代日本語は七色で表わす。しかし英語では六色であり、ロデシヤの一言語では三色、リベリアの一言語では二色にしか分けない。言語によって、色彩の目盛りの切り方が相違しているのである。これが直ちに言語の構造の問題と結びついていることは、言語構造の概念を説明する為の雛型として、スペクトルの例が好んで採り上げられる(*cf.* H.A. Gleason: An Introduction to Descriptive Linguistics. New York 1955. P.4～P.5)のを想起すれば十分である。言語が構造であること、構造とは分節的統一に外ならないことを、此処からわれわれは容易に認めることができる。思考活動は、この目盛りの切り方、言語の構造性に応じて営まれる。同じ虹に対しても、人はその属する言語の構造という既成の論拠の上に於いてのみ、色合を認知し得るのである。スペクトル中の色帯の数を、ミクロン単位で数えるならば、三七五種の多くにのぼると言われる。それを何色かに分割するということは、無限に連続せる外界を、幾つかの類概念に区切り、そこに於ける固定した中心、思想の焦点としての名称をもって配置することである。曖昧で不確かで変動しやすい人間の知覚は、名称によって新しい形をとり始める。客観的世界ははじめて整理せられ、一定の秩序と形態を与えられる。朦朧として不分明な個人の感情、捉えがたい心理の内面も、すべて名称による以外には、自己を客観化し明確化するすべを持たない。スタンダールの「赤と黒」に、ジュリアンとの媒妁のあとで、幸福の陶酔に酔っていたその夜のド・レーナル夫人が、突然、自分の行為の「姦通（アデュルテール）」という怖ろしい言葉に宛てはまるのに気づいて愕然とする場面がある。言語以前の無意識の状態に於ける個人的感情が、判然たる姿をとってその性格を客観的に現示するものは名称であることを、これは端的に物語っている。

かように、語とは人間が習慣的に内界外界を切り取る一つの視点である。その語をめぐって、人間の思考は結晶する。人は思考の拠点であるところの語に依存することによって、物の概念を理解し、内的外的世界との了解をつけるのである。この事実を何よりも具体的に裏書きするものは、例の失語症の研究である。そもそも、失語症には四つの主なタイプを認め得るのであるが、その中「名称の欠如」(Nominal Defects)と呼ばれるタイプは、語と思考の関係の解明に、貴重な寄与をなすのである。(G.Stern: Meaning and Change of meaning. Göteborg 1931. P.96～P.98)或る患者は、諸種の試験に於いて、彼を色

盲かと診断せしめるに足るような間違いを犯した。（ホメロスの色名研究に従事した一部の学者が、古代ギリシャ人色盲説に趨った例を想起せられたい。）しかし彼らの一人は、示された色と同色の物を、机の上の沢山の色の種類の間から選ぶには、支障を感じなかった。チェスに堪能な或る患者は、頭に損傷を受ける以前、ブリッヂの名手であったにもかかわらず、カードの名を想い出せなくなった後は、もうこの遊びは駄目になった。ゲルブ、ゴルトシュタイン等の実験は、色合に対する鋭敏な感覚を持ちながら、色名健忘症にかかった患者に、多くの色の糸の中から、或る範疇に属する色の糸を選ばせようとすると、彼はそれができないばかりか、質問の意味さえ理解しないという事実を実証した。患者には、すべての色は、視覚的に千差万別であるように、悉く別の色だったのである。名を忘れ、言葉というレッテルを失うことによって、彼は、世界を分類する基準、個々の差異を超えて幾つかの高次の単位に従属せしめる能力、天然の色彩の段階の連続性に人間が課した何本かの区分線を導入する習慣を完全に喪失したのである。同じような範疇に入る一群を、其処に結集させる中心としての語があることによって、スペクトルは分割されているのである。語という標識を失った者の世界が、再びもとの混沌に陥入らねばならぬのは当然である。語を欠いては、誰も事態を抽象的に概念表象として把握し、これを思考の具とすることはできないのである。

II

その意味で、われわれの間に「存在しない語」というものを検討してみることは、われわれの思考活動の状態を裏面から測定する、有力な手がかりとなることが考えられよう。もとより、言語がひとつの構造である以上、「存在しない語」の存在は必らず不可避であり、これは自国語を外国語と対照してみれば、簡単に反省されることである。既に動かしがたい確乎たる客観的体系を備えている、家族親族の血縁関係のような、改めて言語による関係編成を要する余地などあるべくもないと信ぜられる分野にも、「存在しない語」、存在しても言語言語によってあり方の同一でない例に遭遇するのである。（註1）われわれはそのような諸例を通して、社会制度とその機能、永い間に培われた思考の習慣が、深く言語面に滲透している事実を見る。

社会が変り、文化が発達し、人間の思考活動の方法も幅も、ますます進歩して来ると、複雑多様な内的外的世界を捉える

に、でき合いの尺度の目盛りである言語をもってしては余りにも不十分であることを痛切に感ずるようになる。従来の語の空白部を、何らかの手段で充たすことによって、世界を整理する為の新たな拠点を設けようと人々は努める。外国語の借用、古語の再生、新語の発明、比喩表現による転用等々が、その結果として登場する。反面、もう役に立たない語は忘れられ、廃棄される。こうして尺度は、徐々に目の刻み方、語彙の構造を変じて来るのである。(註2)

言語の効用とその限界に対する省察は、わけても、言語という既成の道具を用いて、真の実在、あるいは詩的直観の世界を、如何に表現するかに精魂を傾ける、哲学者・詩人に於いて切実である。言語の網に漏れた為に、一個の概念として認識の対象となることなく、人々の意識の深層に文字通り草木のような存在を続けている世界の探索は、真を求め、実在に迫ろうとする彼らにとって、見方次第では、あるいは唯一最大の問題ですらある。彼らは精神の現象を記述しようとして、鋭く言語と対立する。フランス象徴派の特徴的な技法として、感覚領域の異る言葉を組合せた、いわゆる共感覚的表現――これは別に触れるつもりである――が、盛んに活用されたのも、要するに、言語という既成の機構では表現し切れない世界を、逆に暗示的に、読者の共感に委ねることによって、却って積極的な表現効果を狙おうとする意欲の反映であって、言語に向けられた不信と絶望と執拗な要求が、根柢に横たわっていたのである。哲学者は、しばしば詩的な表現に藉りて己れの思想を語る。恐らく彼には、そのような詩的表現以外に、自らの深い思想を伝える言葉を持たないのである。彼らは、詩人から比喩を借用し、そのすばらしい構想(イマージュ)によって、全自然を暗闇から呼び出すのである。此処に於いてか、哲人は同時に詩人でもあり得るわけだ。「存在しない語」に対する注意をわれわれに促した人が、他ならぬヴァレリイであることは、私には大変興味深いことに思われる。(ヴァレリイ全集 XVI「詩についての想ひ出」参照)

「存在しない語」は、「存在しない思考」を常に予想する。タスマニヤの土民が、各種のゴムの木に対して、それぞれの名称を冠しながら、「木」に相当すべき語を有しないのは、彼らに一般的な「木」の概念が無いからである。ニューギニアのタモでは、いろいろな方角に「行く」という単語は多数あっても、単に「行く」という概念を意味する語が欠けている。アメリカのフロン語では「食べる」や「見る」に当る語が無く、代りに何を「食べ」何を「見る」かに従って、細い区別は行われる。ブラジルのバカイリでは、各種の「鸚鵡」とか「棕櫚」とかは一々特別の名を持っているが、「鸚鵡」なり「棕櫚」なりを総称する語は知られていない。何れも、未開人特有の一般化と抽象化の能力の欠如を露呈する例として夙に著名

である（イェスペルセン「言語」・ウェルナア「精神の発達」など参照）が、かたわら最も誇張した姿で、「存在しない語」に「存在しない思考」の随伴する好例でもある。

例えば、日本語に「愛する」という語が、昔は存在しなかったということ。ラ・ロシュフコーの箴言に、もしも恋愛に関する話を聞かなかったならば、決して恋愛を知らなかったであろう人々について書かれた一節がある。同様に、もし日本語が「愛する」という言葉を知らないまま、現在に到っていたと仮定すれば、日本人のこの感情に対する把握のしかたは、きっと今日のわれわれの把握と同一ではあり得なかったに違いない。「愛」と「憎」とは正反対の概念としてわれわれの裡にある。「憎む」という語に対して反対語を訊ねられれば、現代人なら即座に「愛する」を挙げる。ところが、枕草子第六八段「たとしへなきもの」には、

たとしへなきもの。夏と冬と。夜と昼と。雨降る日と照る日と。人の笑ふと腹立つと。老いたると若きと。白きと黒きと。思ふ人とにくむ人と。……

と、「憎む」に対しては「思ふ」が現れている。「愛する」という言葉の存在していなかった昔、こうした感情は、広く漠然と「思ふ」の範疇に包括されていたのであり、確立した独自の概念としては存立していなかったことを、右の一文から知らされるのである。結局、話はまた世界の切り取り方の問題に帰って来るわけである。たとい相似た感情を切り取ったにしても、ひとたび言語もしくは時代を隔てると、其処に自らなる不一致が生じ、両者が符合することはむしろ稀である。中国の古典に見える、「天不愛道」という一句を、もし《天は正義を愛さない》などと訳したとすれば、それは甚しい誤りを犯したことになる。「吾愛吾銭」の「愛」が、《惜しみけちつく》意であるように、まさしくこの一句は、《天は正義を万人に対して惜しむことがない》と理解されねばならない。ということは、シナ語の「愛」という言葉は、単なる love の要素を切り取ったものではなく、近隣の「惜」の要素をも、併せて切り取ったものであることを示す。カールグレンが、これについて「愛」というシナ語には、((to love)) と ((to be stingy with)) の二つの意味があったかの如く述べた件り（B. Karlgren: The Chinese Language. New York 1949. p.64）には、この二つの感情を別箇の感情として切り取る西洋流の思考法が図らずも顔をのぞかせている。

日本語の「愛ヲ」しは、その点、シナ語の「愛」に相通う性質をもっている。「愛ヲし」と「惜ヲし」とが同音語であるのは、決して偶然で

はない。「愛し」が、「惜し」より派生したものであり、上代に「愛し」の語例を見出し得ないことは事実としても、「香久山は畝傍雄男志等」（万一三）に関して、「雄」を助詞と解し、「男志」に「愛し」の気持を持たせて解くことは、依然有効であると私は見ている。畝火を独占したいという香久山の心情を、「をし」の一語に、作者は恐らく託したのである。

なお、日本語に於いて、一見「愛する」に近い意味を有するように思われぬでもない、「恋ふ」は、意味論的に再建してみると、（相手が眼前に居ないのを淋しく思う）という、英語の miss に極めて近い辺りに、その原義があったと覚しい。上代の「恋ふ」が、大部分助詞ニを承けること、及び万葉集が、「恋（コヒ）」という語の音声を表記する際、「孤悲」の文字で宛てた用字意識は、相俟って再建された原義に窺われる消極性受動性を支持している。

Ⅰ

言語を構造として把握する、ド・ソスュールによって創始された構造主義言語学が、語彙を研究対象とする意味論の側に積極的に迎えられ、この学問の進路に決定的な方向転換が起ったのは、一九三〇年代の初頭のことである。

新興意味論の代表者たるトリエール（J. Trier）は、気まぐれな好奇的関心から、孤立した個々の語の語原やら意味変化やらを、言わば原子論的に追うことで満足していた、従来の意味論を非難し排斥して、語を概念的に共に属する語群の組織の中で全体的に捕捉する要を力説し、新しく「野」（Champ Linguistique）の概念を提出した。（これが同時代のゲシタルト心理学の影響を受けて成ったものであることは言うまでもない。）

一つの語は、単独では決して意味を持つことがない。あたかも、モザイクの中の一つ一つのように、語は、全体の中に於けるその語と近隣の語との間の相互の対立を通してのみ、固有の意味と価値を獲得する。学校の成績が、秀・優・良・可・不可と附けられるとすると、「可」という成績を表わす語は、段階の基準が五つより成り、それが、「良」と「不可」との間に位置しているという、正にその位置によって、はじめて固有の意味と価値が具体的に確定する。英国陸軍の階級用語、captain は lieutenant と major の間のその位置によって決定される。眼を海軍、空軍の方に転ずると、其処では同じこの語が完全に違った地位的な価値をもって存在するのは、陸軍とは全構造が相異るゆえである。

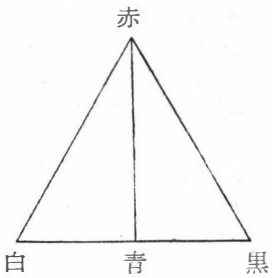
すなわち、所与の概念分野は、個々の語が互いに関係し、各要素が相互に限定し合い、その占める地位の価値を其処から

抽き出すところの、構成され、かつ分節的な一総体であるとする、これが「野」という概念の根柢である。時代の精神や思考の形態は、この「野」の構造に反映し、また「野」の構造は、時代の知的活動に影響せずにいない。トリエールは、ドイツ語に於ける悟性の用語の歴史に、「野」の理論を適用して見事な手本を示した。たしかに、曾て一全体としての構造の中に、個々の要素の配置転換と再分配の史的展望の中に、人々の世界把握の状態を再建するというような洞察が加えられたためしは、絶えて見られなかったのである。トリエール達の新しい方法は、意味論の多くの部門について、実り豊かな結実を約束した。第一は、共時論的平面の上に、特定の時代の語彙の内部の構造を俯瞰すること。第二は、他の言語に於ける同一の野の機構を比較すること。第三は、特定の言語の継起的な状態を比較しながら、語彙の構造の歴史を記述すること等々。

但し、トリエールの「野」の定義の内容は、其の後さまざまな問題に対する種々の検討が進むにつれ、不都合な箇所も目立つようになり、次々と批判修正が加えられつつある状態で、一義的な形で最終的決定を見るに至っているとは言えない。(註3) 一つの語から聯想的に喚起される諸々の語との関係に於いて、「野」の概念を規定しようとしたバイイの「聯合の野」(Champ associatif) という構想は、トリエール等の考えとは自ら異った基準に立って、なかんずく卓越したものと思われる。ソスュールが原論に指摘している、語の聯合関係(邦訳一六七頁)をもとにする彼の考えによれば、「野」とは、ソスュールのいわゆる「所記」による聯想だけに限定しても、同義語、対義語は言うに及ばず、およそ、その語の喚び起すあらゆる分野にわたる、非常に広範囲な「所記」の聯合状態に適用されるのである。しかし、とにかくトリエール等による「野」の概念の提起自体の正当性は、今日、意味論に携わる大多数の人々の等しく承認するところである。

日本語の色名の構造と歴史などは、「野」の理論の応用によってかなり明瞭な形で説明し得る例である。ここでは特に対義語との聯合関係を主眼とする「野」の再建を企ててみたい。

さきに「古代日本語に於ける色名の性格」(国語国文二四ノ六・一九五五年六月)と題する拙稿で詳述したように、厳密な意味で、古代日本語には、アカし、シロし、クロし、アヲしという僅か四種の色彩語しか存在しなかった。さてこの四つの語について、共通に指摘される形態的特徴は、揃って形容詞としての活用形式を有するというところである。これは件の四語が、純粋に色を色として表わす抽象語であった証拠である。そして原則的にこの四種は、日本語の歴史を貫いて、日本語の色彩感覚の根幹ともなっているのである。今、各構成単位が、対義語となって対立し、双極的に結合し合う相互関係を、便宜図式で描く



ならば上の如くになるかと思う。一番強い緊張度にある対立関係は、何を措いても「白」―「黒」であり、やや弱い度合に於いて、「白」―「赤」、「赤」―「黒」、「赤」―「青」が各々対立しよう。「青」には、古くは「青色」という本来の色合ばかりでなく、「白」と「黒」の中間的性質に於いて、「灰色」の類も含意し得るだけの広さがあったのではないかと想像される節がある。上代の「青雲」という言葉が、果して空を指すものか、それとも雲の謂であるかという疑問は、おおむね雲説の方を是とする（吉井巖「青雲汝」（万葉第五、一九五二年一〇月））が、「青」の内容についての説明は未だ尽されていない。「青」を「白」と「黒」の中間的性質という観点に拠って解釈する時には、

青雲之白肩津（古事記中巻）
青雲能靄極、白雲乃向伏限（祝詞祈年祭）
白雲の棚引く国の青雲の向伏す国（万13三二九）

に於ける「青」と「白」の照応も、敢て怪しむに当らないであろう。「白」―「黒」の中間に位し、双方に融合し得る性質（註4）が「青」自身に内在するがゆえに、あるいは枕詞「青雲の」をして「白肩」の「白」を誘導せしめ、あるいは「白雲」と「青雲」を同格的な対句中に配することを許容するのである。概略、上記のような事情を綜合して、「白」―「黒」を結ぶ線を底辺とし、「赤」を頂点とする正三角形に、頂点と底辺の真ん中に位置する「青」をつなぐ垂線の引かれた図式が再建された。古代日本語の色名は、右の図式をもって、その構造の「野」としているのである。外界の色彩を認識するに当っての古代日本人の態度ならびに思考活動は、終始この構造の「野」の図式に則して営まれ、これを逸脱するようなことはなかったのである。

次に、断定は憚るけれども、古代の四つの色名形容詞は、更に時代を溯れば、元来は色彩を意味する用語ではなく、光の感覚を担う語ではなかったかという推定が、一応成り立つ。アカは〈明〉、クロは〈暗〉、シロは〈顕〉、アヲは〈漠〉をもって原義と見做すのである。（前引の拙稿参照）この仮設を踏まえて、四つの形容詞の対立関係に検討を加えれば、アカはクロと結びつくこと、

秋の夜の月の光しあかければくらぶの山も越えぬべらなり（古今四）

に於ける場合と揆を一にしたであろうし、シロも、アヲと対立するものであったろうと簡単に推測できる。これを図式で表わせば、上図の如き二系列の体系となる。同じ数の四語でありながら、構造は彼と此とでは完全に袂を別ち、別種の形態を形成していることを注意しなくてはならない。彼とは色彩の世界であり、此とは光の世界である。古代日本語の色名が、光の感覚を母胎として発生したということは、その布置と配列の模様がこのような変化を遂げたということなのである。然りとすれば、日本語の色名成立の歴史は、この二つの対義聯合の野を比較することによって、体系的記述を得るのであって、個々の語の意味の変遷に関する断片的な知見だけでは到底十分とは言えないということになる。

明 ——— 暗
顕 ——— 漠

語の構造的把握を志向する「野」の理論は、未完成であるだけに、主題の撰定、適用の方法、「野」の設定のしかたその他に相当広い幅を擁しているものであるから、今後多方面にわたる発展が期待される。社会学的方法との提携の下に、時代文化の全貌を再建しようと意図するマトレ（G. Matoré）の La Méthode en Lexicologie. Paris 1953 は近来の一成果である。総じてトリエール以来、「野」の理論が往々に文化の形態と性質の分析にまで参与し得ているという点は、顕著な特長である。それというのも、語彙の構造に人々の世界観、世界把握の態度と様式が織りこまれているからであって、まことに近代意味論に第二の革命をもたらしたアルマン（S. Ullmann）も言うように、「野」の理論を提出したトリエールの功績は、「最も重要でありながら、捉えどころのない力である、思考に及ぼす言語の影響の決定に対して、新しい技術を展開せしめた」（The Principles of Semantics. Glasgow 1951）（註5）ところにすこぶる大きいのである。

繰り返して言うならば、言語は構造である。音韻、文法に於ける場合とは、少からずその様相を異にするとは言え、語彙についても本質的にはまた構造であることに変りはない。意味論が将来どのような途を辿るにせよ、あくまで基礎はこの構造という概念の上に据えらるべきである。構造主義意味論が浮彫りにして見せたものは、こういう思想であった。それは、未だ徹底的に認識されてはいないけれども、つまるところ常識の真理に他ならぬものである。

（註1）一〇〇年前までは、「兄弟」「姉妹」の観念を表わす語を持ち合せなかったハンガリー語。「父」「母」の用語を肉体的な血族関係と族長制度の組織とで使い分けた古代印欧語。ローマ法に於ける財産分与の法的地位にかんがみて、「伯父」と「叔父」、「伯

母」と「叔母」の間に厳格な区別を立てた古代ラテン語。

（註2）語彙以外の部門、音韻体系や文法体系などになると、社会との関聯はいちじるしく稀薄で、社会が変動を生じたからといってそれらは微動だにもしないのが常である。旧ロシヤ帝国が覆えされ、共産主義を奉ずるソヴィエトがこれに代った後でも、ロシヤ語は昔通りの言語構造を改めはしない。一九五〇年の有名なスターリン論争は、経済的社会的下部構造によって全面的に決定づけられた上部構造として、言語を取扱うことはできないという結論に到達した。（J. Pérot: La Linguistique. Paris 1953. p.127）

（註3）「野」の理論をめぐる諸問題については、手近なところで

S. Öhmann: Theories of The "Linguistic field." WORD. VOL.8. 1953, aug.

は有益かつ便利な文献である。又別に左の二書に於ける関係部分、特にその前者からは稗益されるところが多い。

S. Ullmann: Précis de Sémantique Française. Berne. 1952

P. Guiraud: La Sémantique. Paris 1955

（註4）「青」と「黒」との接触融合は、後世にもはっきり認められる。「筑紫方言」（国語学大系20）の「紺をくろ」という記事もその例であるし、現代の「黒潮」「緑の黒髪」などの用語も勿論その例である。

（註5）本書はいちはやく本国に於いて絶版とされた模様である。この引用はしばらく前記 Öhmann の論文より借りた。

（一九五六年八月）

—— 京都大学大学院特別研究奨学生 ——